

## 特集 裁判ことばの言語学

### 実用の学としての法言語学の射程

実用の学としての法言語学 堀田秀吾

目撃供述の信頼性 伊東裕司

法廷通訳における異文化の壁 吉田理加

おとり捜査における違法性認識をめぐる言語分析 首藤佐智子

コーパスを利用した法廷言語分析 中村幸子

法言語学確立の背景と今後の展望 大河原真美

説得の論理とレトリック 野内良三

裁判員時代の法廷用語 藤田政博

商標の類似性判定 堀田秀吾

裁判速記録の有用性 兼子次生

◆巻頭エッセイ

鈴木一誌／芳賀 綏

◆インタヴュー

プラスチックワードをめぐる

——ウヴェ・ヘルクゼン教授に聞く

聞き手・構成 高田博行



連載●インド学へのいざない「6」(最終回)

# 入門インド学

後藤敏文

(つひしげふみ)

過去五回にわたって「インド学」を私なりに紹介してきた。あくまでもアーリヤ語文献に限った文献学的インド学への「いざない」であることをお断りしておく。その輪郭、インド・イラン学やインド・ヨーロッパ語(印欧語)比較言語学と相互に果たす役割、将来への課題などについては第一回に少し触れた。最終回は入門へ向けて、実践的情報のいくつかをお伝えしたい。

## 1 文法書

インド学への入り口は、なによりも先ず「サンスクリット語」の学習である。要は手頃な文法書(例えばJ・ゴン

ダ著、鎧淳訳『サンスクリット語初等文法』)によって文法の概要、いわば目次立てと、音韻法則、主要な活用表を頭に入れるか、すぐ調べられるように準備しておくことである。文法研究そのものに理解のある先達から、目的にかなった助言が受けられることが望ましい。文法書には、とすれば些末な事柄が場所を取っていたり、重要事項が十分目立つように扱われていなかったりするからである。学習用の文法は簡単なものがよい。インド学に必要な文法は規範ではなく、現実にテキストに残された言語事象の合理的理解であり、「文法」は私たちの理性の側にあるものだからである。名詞語尾の出発点には、語幹用とそれ以外



の語幹用の二系列しかなく、あとは二次的な類推と平均化の産物である。その出発点を押さえておくことは理解に資する。子音語幹の幾つかに見られる強語幹、弱語幹は「アップラウト」の結果を受け継ぐもので、その原理のレベルに一步だけ踏み出してみると解りやすくなる。アップラウトとは、一語一アクセントの原則によって屈折言語が形成される際に、一単語を構成する要素のどこにアクセントが保たれ、強い音節が残されたかという体系的選択に起因し、印欧祖語の段階で既に経過を了えていた現象である。

動詞の語尾にも、それぞれ能動、中受動の二態から成る一次語尾と、その基礎となる二次語尾の二系列があるだけである。語幹（現在、アオリスト、完了、特殊な現在語幹）の形成原理と機能を理解するにはヴェーダ語の動詞組織に遡る必要があるが、原理を簡単に説明したものはない。最近解明された部分が大きいからである。とりあえず『言語』二〇〇八年一二月号（三〇四頁）を一読されたい。活用表などの安直な検索には A. Macdonell, *Vedic Grammar for Students* (1916 以後重版) が便利である。(学術用には同じ筆者の *Vedic Grammar*, 1910 がある。)

検索には W. D. Whitney, *A Sanskrit Grammar* (第二

版 1899 以後重版) がヴェーダから古典期までを網羅的に扱っており信頼できる。より本格的な文法書は、J. Wackernagel が始め、A. Debrunner が引き継いだ *Altindische Grammatik* である (既刊 1-3 巻 1896-1957、音韻、名詞複合語、名詞語幹形成法、名詞代名詞活用とそれらの補遺)。それ以後、K. Hoffmann, *Der Indunthio im Veda* (1967), J. Narten, *Die sigmatischen Aoriste im Veda* (1964), T. Gotō, *Die "I. Präsensklasse" im Vedischen* (1987) をはじめ、特に動詞研究の進展が著しい。これらの成果は中期インドアーリヤ語をも含め、あらゆる時代の文献研究に必須であるが、研究書を手元に置き、ドイツ語を用いる必要がある。

古インドアーリヤ語(「サンスクリット」)は他の印欧語同様、印欧祖語の文法を歴史的に引き継ぎ、しかも根本的な組み替えを経っていない古い段階の言語である。文献の理解そのものにも、歴史文法の簡単な知識と方法とが役立つ。e o ai au が本来 ai au ai au であつたと置き換えて考えるだけで、母音の前では自動的に ay av dy dv として現れることが構造的に理解できる。西洋古典学の歩みを追うかのように、残念ながらインド学も文法研究を次第に印欧

語比較言語学に譲り、かつての訓練を放棄してしまった。

歴史文法の現段階を具体的に知るには H. Rix, *Historische Grammatik des Griechischen* (初版 1976) が最も要を得ている。ある程度サンスクリット入門を果たし、ヴェーダ語の文法を調べられる段階に達したら、ギリシヤの文字と簡単な文法への見当があれば利用できる。

読本としては Ch. R. Lanman の *A Sanskrit Reader* (1906 以後重版) が推薦できる。一頁目から notes の指示に従い、挙げられている Whitney 文法の該当項目を確認し、優れた語彙集を利用しながら、愚直に取り組む姿勢が大切である。自習用に作られており、現にこれによってサンスクリットを独習した W. Hopkins はイェール大学教授として叙事詩研究の基盤を築いた。統語論には、パーニニ文法を顧慮した J. S. Speijer の *Sanskrit Syntax* (1886 以後重版) を比較的初期段階から用いることが勧められる。本格的なものにはヴェーダ語、ヴェーダ散文を対象とした B. Delbrück の *Altindische Syntax* (初版 1888) があり、これが基準となる。

サンスクリット正書法最大の不幸はサンディと呼ばれる音韻結合で、基になる単語レベルではなく、文の発語レベ

ルでことばが記録されていることである。もう一つの不幸は、サンスクリットの音節構造に合わない音節文字（ヒンディー語に使用されるデーヴァナーガリー文字）が用いられることである。ローマ字テキストの方が分析に向いているが、インドではデーヴァナーガリーによって出版がなされ、辞書、参考書、論文にも用いられるので、はじめから慣れ親しんでおくことが効率上必要である。

古典サンスクリットの学習から、ヴェーダ語は勿論、パリー語、アルタマーガデーイなどの中期インドアーリヤ語研究に進むことができる。W. Geiger, *A Pali Grammar* (英語版 1943, K. R. Norman が手を加えた版が 1994) / R. Pischel, *A Grammar of the Prākrit Languages* (1900, 英訳 1965 以後再版あり) が今もって標準的文法である。ゾロアスター教典『アヴェスタ』、アケメネス朝碑文の古ペルシヤ語をはじめ、イラン学もサンスクリットから出発する。H. Reichelt, *Avestisches Elementarbuch* (1909 以後重版) / K. Hoffmann-B. Forssman, *Avestische Laut- und Flexionslehre* (第一版 2004) / R. G. Kent, *Old Persian* (第二版 1953) などを用いる。印欧語比較言語学にとっても、サンスクリット学習が最初の入り口である。

## 2 辞書

用例に基づき語義を確定するには、今もって O. Böhtlingk - R. Roth, *Sanskrit-Wörterbuch* 全七巻 (1855-1875 重版あり) による。通称 Petersburger Wörterbuch といはれ、PW と省略する。この辞典を基に、E. Leumann をはじめ当時のドイツの若手が翻訳編集の実務を担当した Monier Monier-Williams の *A Sanskrit-English Dictionary* (1899 以降重版) は学習時の使用に便利であるが、「動詞前綴り+動詞語根」を見出し語に採用しており、例えば *ud-gam* 「出て行く」は *u* の欄に並ぶ。PW では *gam* 「行く」の項の下に *abhi-gam* 「へと赴く」、*u-gam* 「来る」などと共に収録されている。この方がサンスクリットの語形成法にかなっており、語義をその基礎から押さえるのにも適している。しかし、事情は現代ドイツ語にも該当するところがあり、一長一短と言えばそれまでである。(PW 方式を採るドイツ語辞書に H. Paul の *Deutsches Wörterbuch* がある。) PW の語義だけを要領よくまとめた学習用語彙集に C. Cappeller (独語版 1887, 英語版 1891 再版あり)、K. Mysins (独語 1975 以降重版) がある。古典文学の授業準備などに V. Sh. Apte, *The Practi-*

*cal Sanskrit-English Dictionary* (1957-1959) が便利なところがあるが、サンスクリット語彙の持つ文法的構造、派生原理が掴みにくく、研究には勧められない。

M. Mayrhofer, *Etymologisches Wörterbuch des Alindodriscchen* (1986-2001) は印欧語比較言語学やインド・イラン文献学の成果を総動員した辞書であり、どの分野を扱うかに拘わらず、早くから親しんでおいて損はない。印欧語比較言語学における最新の信頼できる成果という意味でも一級の書である。ただし、原義を重んじるため、古典期には普通である語義が挙げられていなかったり目立たなかったりする点には注意がいる。語源は文法と深く関わり、語源の確認は文献理解に資するばかりでなく、西欧諸語との繋がりを教え、理解の幅を広げてくれる。他方、仏教語が漢語、日本語の中で辿った経緯を正確に把握することは、単語を頼りに歴史を理解する道を拓く。

## 3 翻訳など

古代インド文献の翻訳は常に改善されるべく運命づけられている。内容が解っているものを日本語でどう表現すべきか工夫するという性質のものではなく、文献は研究対象

に留まり、「愚直訳」から出発せざるを得ない。往古のインドのエリートたちが考え抜き、議論によつて選び抜いた思考の精髓は、高い緊張度をもつて達成された当時の「世界理解の学」を今に遺す。仏教はそうした流れの只中に現れたものである。また、初回に触れたように、古代インドの文献は現代にまで連なるインド・ヨーロッパ語族拡張の歴史を証言する資料でもある。多少読みづらくとも、正確を期した翻訳が揃うことが切に望まれる。原石が広く紹介された上で初めて読書人一般に共有される宝石となり、その輝きがしかるべく評価受容されるものとなる。ここでは、日本語訳に限って言及する。

ヴェーダ文献には、『リグ・ヴェーダ讃歌』(一九七)、『アタルヴァ・ヴェーダ讃歌』(一九七)、『古代インドの説話』(二〇七)など、辻直四郎による抄訳と紹介がある。ウパニシャッドには各種の翻訳があるが、いずれも古典サンスクリットの理解から手探りで遡ったものという印象を与える。ヴェーダ文献、特に、ブラーフmanaにおける祭式議論の展開の上に開花した文献群という性格を正しく反映した翻訳はない。この領域は最近になって解明されつつある分野であり、事情は欧米の現代語訳においても変わらない。

『マハーバータ』は上村勝彦により全体の約半分が訳され(第八巻途中まで三〇二-三〇五)、訳者の不幸によつて中断されている。『ラーマヤナ』は、全七巻中二巻まで岩本裕が翻訳し紹介した(一九〇、一九五)。古典文学の幾つかには、辻直四郎、田中於菟弥、上村勝彦をはじめとする訳業がある。哲学学派の著作の邦訳はひとまず置き、法典類、実利論、修辭学、医学、天文学、数学、占術関係書に翻訳抄訳がある。最近のものは、渡瀬信之、上村勝彦、矢野道雄ほかの努力によるところが大きい。

仏教文献には、周知のように邦訳が比較的多く存在し、手に入り易いものも多い。ただし、原典を手にしない読者にはどこまでが学術的に検証されたものか解りにくいことが多い。また、漢訳、チベット語訳、さらには後世の教義解釈からの読み込みが多いことには特に注意を要する。仏典に関する厳密な文献学的研究(個別文法、韻律、語彙とその使用法に関する正確な確定)には今後に残された部分が多い。新写本の相次ぐ出現が事情を一層複雑にしているが、将来が期待される分野ということをも意味する。

翻訳は元来あらゆる観点からの検証や知識を必要とし、代表的原典の翻訳を整備することは、インド学が人文学の

中で正統な市民権を得、人文学全体に貢献するための突破口となりうる。インド学芸の伝統と注解の歴史に敬意を払いつつ、批判的に原典成立時の意図に迫る理解が求められる。その際、広義の文法が果たす役割は大きい。今日しかるべき評価を得ていないが、文献学的言語学が人文学に果たす基礎的役割には大きなものがあり、その一大典型としての印欧語比較言語学を支える意味でも、インド学に期待されることは大きい。

#### 4 おわりに

我が邦のインド研究は「インド哲学」という名称に示される枠組みに歴史的に制約されてきたところがある。無論その中で達成された成果、達成されつつある研究活動には誇るべきものがある。他方、インド学をリードしてきたドイツにおいても、デイスイプリン内部における文献学的言語学の衰退と共に「インド哲学」「仏教学」に近い傾向が主流になりつつあり、その意味での国際連帯は強まりつつあると言える。しかし、講座名やそれと相互に助長し合う科学研究費細目などの制約を脱して、ドラヴィダ、ムンダ等アーリヤ以外の文化をしかるべき位置に置き、今日的な

視覚的分野である美術史、考古学（特にインダス文明やバクトリア・マルギアナ考古複合）、歴史学や、栽培植物学、生物学などをも視野に入れた、人類史とその価値判断に連なるようなインド学が展開できないであらうか。

そのような展開が見込まれるとしても、アーリヤ語文獻の地道な研究の積み重ねと、その中で得られた検証点や技法の重要性に変わりはない。その上で、インド学はインド文化圏全体の歴史的・人文地理的研究へと発展することが望ましい。歴史的条件と専門性の高さ（訓練に懸かる労力時間の大きさ）とから、古い文献研究をデイスイプリンの中心に据えつつ、現代に至るまでの、より間口の広い諸領域の成果を取り入れてゆくべきであると主張したい。

筆者の信念としては、「オリエンタリズム」云々というような、いわば部外からの理念的議論ではなく、一九世紀文献学が目指したものの内実とその成果が人類史理解にもつ意義を正しく理解した上で、人類史の今日を普遍的理性の観点から捉えることへ向けて、具体的な材料を吟味し提供する営みの重要性を強調したい。「時代遅れが次代を導く」という宣言をもって連載を終えたい。ご批評を乞う。

（東北大学大学院文学研究科／インド文献学・言語学）